

人生の使い方

木下 真直

山梨大学医学部皮膚科学講座

何人とも今日一日の時間は平等である。どの時代に、どの国に、どの家に生まれるか、そもそもどの生物に産まれるか（人なのか、犬なのか）、世の中いろんな“ガチャ”という不平等に溢れているが、時間だけは平等である。一度きりの人生を、どのように仕事とプライベートに配分するのがよいのだろうか、と最近考えるようになった。

私の叔父・叔母は、理学部の大学教官で、人生を研究に捧げていた。子どもころの私は、“お金にならない研究”になぜ人生の貴重な時間を費やすのか、と叔父・叔母の生き方を奇異に感じていた。理学部よりも医学部のほうが実利的な人生を送れそうだと短絡的に考えたこともあり、医学部に進学した。

私が入学した山梨大学は、有志の医学生が研究室に所属し、研究に触れる「特進コース」が新設されたばかりであった。大学入学早々、私は面白そうだと興味をもち、とくに神経薬理学の研究室に惹かれ、志願した。

神経薬理学の教授は「サイエンスをやるからには、親の死に目にも逢えないぐらいの覚悟をもて」という強い情熱をもっており、深夜遅くまで仕事をし、教授室内に寝袋で寝泊まりするほど人生のすべてを研究に注いでいた。

医学生であった当時の私は、その背中に憧れを抱き、またサイエンスの面白さに取り憑かれ、“実利的な”仕事に就くという当初の医学部進学への安直な志向を改め、サイエンスに身を投じてみたいと思うようになった。

卒後も研究を続けたいとの思いから、基礎医学と臨床医学の距離が近く、また島田眞路前教授が率いるサイエンスへの造詣が深い母校の皮膚科に専攻を決めた。神経薬理学の教授の背中をみてきたので、寝袋や小型炊飯器を医局に持ち込み、臨床の合間と深夜・休日を費やし、研究に邁進してきた。医局の中では浮いた存在だっただろうが、それを寛容に受け入れてくれ、支援してくれた川村龍吉教授、小川陽一講師に感謝している。こうして



私の 20 代は研究で消費した。

私が 31 歳のとき、世界中が新型コロナウイルス感染症で混乱していたが、米国留学をする機会をいただいた。ただ、単身・感染流行・渡航制限がある中での留学は不安でいっぱいであった。当時は米国内でもロックダウンなどの規制が厳しく、生身の交流が皆無だった。

患者さんや同僚との交流があった日本での職場環境と打って変わり、留学したもの、在宅で過ごす時間が長く、強い孤独と寂しさを感じた。家族がいれば心の支えになってくれたのだろうか。私はこれまでの人生で、プライベートや家庭を構築することを蔑ろにしたことを悔いた。

これからは時間を効率的に使い、優先度をつけながら臨床・研究とプライベートのバランスを保っていきたい。

さて、話は変わるが「医師の働き方改革」のもと、医師の労働時間が厳密に管理されつつある。仕事の効率化は重要であり、大賛成である。ただ、臨床医が研究活動を行うことを「自己研鑽」として軽視される懸念がある。サイエンスは趣味としての側面もあるため、自己研鑽で異議はないのだが、科学者が評価される環境ができないと日本のサイエンスがますます衰退していくと危惧している。

今日が人生で一番若い日である。残された人生が短いほど、やりたいことを実現できる可能性が減る。仕事もプライベートも全力で日々を生きていきたい。